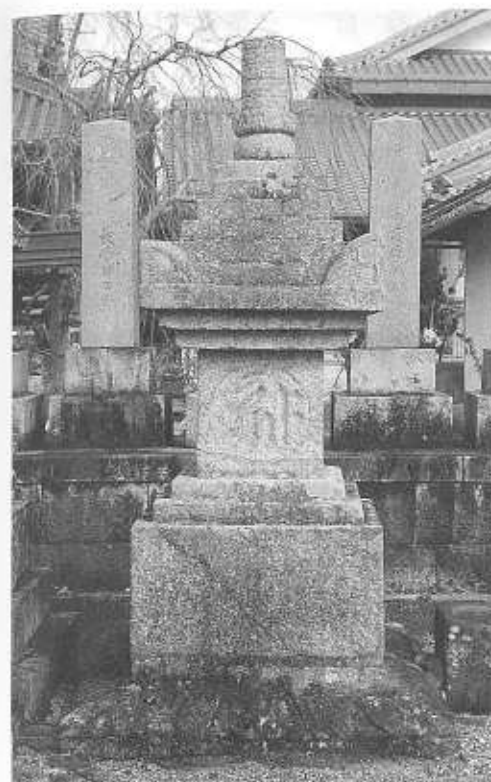


金龍院宝篋印塔（北塔） 嘉元三（一三〇五）年 市指定

甲南町竜法師

甲南町竜法師の浄土宗金龍院にあり、本堂前の石積み基壇上に並ぶ戦没者墓の南側に、反花付基壇上に東面して建っている。花こう岩製。相輪は後補で現高は一五一・三センチメートルであるから、もとの高さは二一〇センチメートルを測る七尺塔であろう。

基壇は四石を合わせ、複弁五葉に隅と各弁間に界線（細い蓮弁）を入れ、複弁は珍しく子持ち複弁に造る。さらに特異なのは反花上端を二段に造ることである。通常は薄い一段を設け基礎を



写609 金龍院宝篋印塔(北塔)

受けるが、更に五・八センチメートルの段を作り付け基礎を受けているのは類例の極めて少ない手法である。基壇周囲はセメントで固めるが、四石が沈み込んでいる。

基礎は側面素面の二段式で、南面する側面右寄りに四行二六字の銘文を陰刻するが一部が読めない。

嘉元乙巳三年十二月廿□日

大願主沙彌一夢

阿闍梨道羅

敬白

塔身は各面の月輪を彫り沈め、内に雄渾な金剛界四仏の種子を
刷毛書き薬研彫りで配している。この月輪を彫り沈める手法は梶

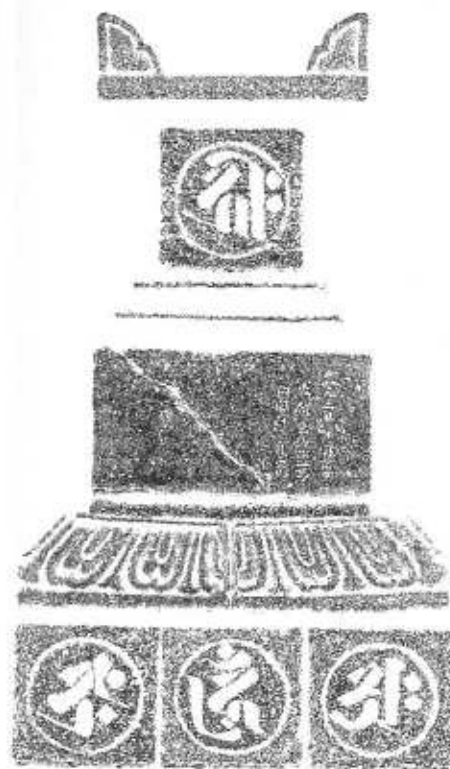


图105 金龍院宝篋印塔(北塔)拓本

下では最古であろう。

屋蓋は軒下二段、軒上六段とし、隅飾りは二弧輪郭付きで内部は素面とする。隅飾りの側面はわずかに湾曲する。相輪は後補とされるが五輪を残し以上を欠失する。伏鉢・請花は通常のものよ

り低く造られる。近くの勢田寺（甲南町杉谷）にも類品があり、このあたりの地方色ともいえよう。

注目すべきは基壇の子持ち複弁の手法で、関東地方では鎌倉時代後期の宝篋印塔の遺品の多くがこの形式を踏襲するが、関西ではいたって少なく、誠心院（京都府）の正和二（一二三三）年宝篋印塔など少数例が知られるのみである。

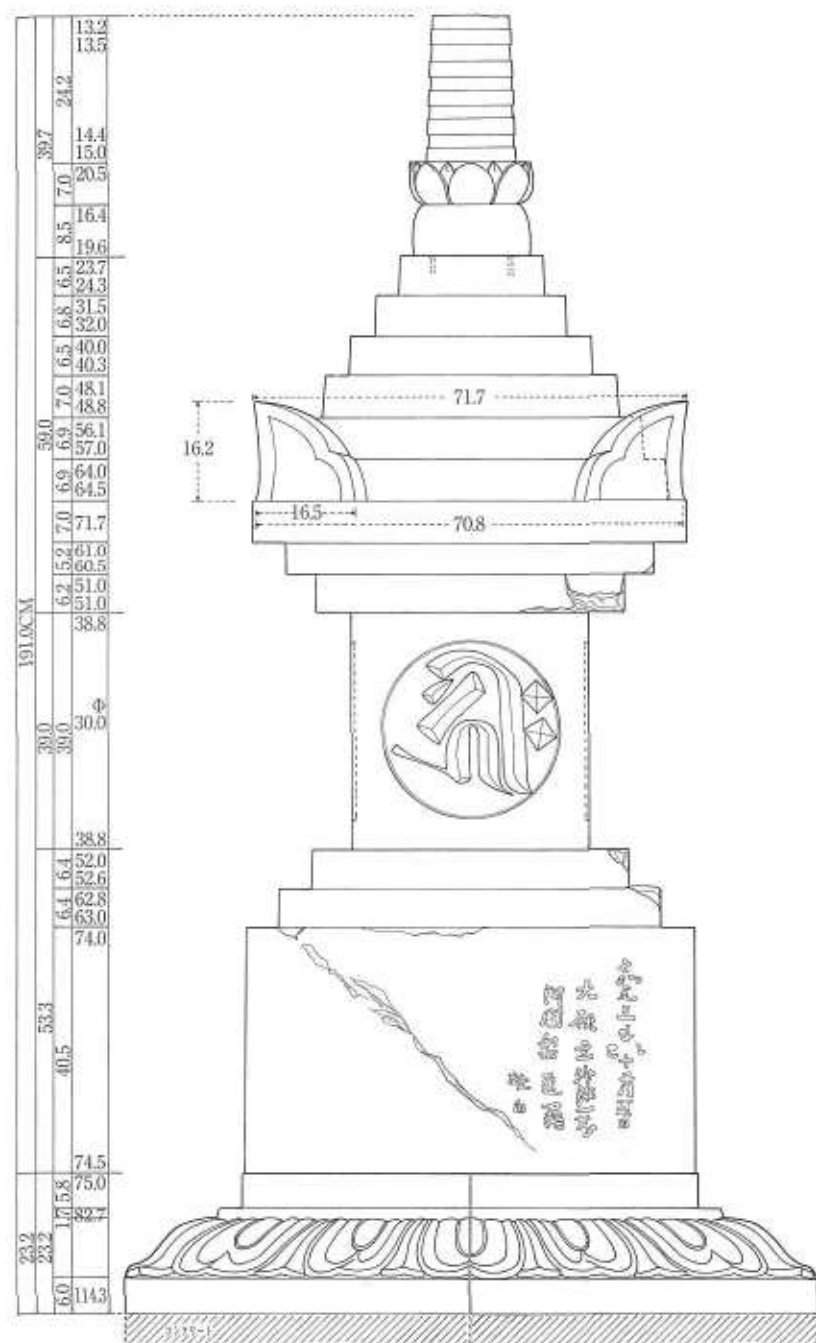


圖106 金龍院寶篋印塔(北塔)實測圖